

## 「御陰様」

私たちは、相変わらず勤勉で合理的であろうと努め、世界有数の社会を維持しているのですが、にもかかわらず現況は不祥事も多発しており、道徳的に劣化し続けているという感が拭いきれません。何か深いところに欠陥がありそうです。

こうした場合、歴史をさかのぼって考えてみるとヒントが得られることがありそうです。

縄文時代の世界観が示されているのが遺跡貝塚です。貝塚は長らくゴミ捨て場と説明されてきました。現在の教科書にもまだそう書かれています。しかし、貝塚には、食物の殻や骨などの他に、道具、狩を共にした飼い犬や、装身具をまとった人間も埋葬されていることが判り、いまの考古学では、そこは、自然の恵みに感謝し、使命を終えたものを偲び、その再生、さらに魂の永遠を願う祭祀の場であったと判断されるようになっていきます。

縄文共同体は、自分たちをとりまく世界に対して見事な作法をもっていただけです。以前日本人は「もったいない」とか「お陰様」という言葉を日常使っていました。その源をここにみる気がします。

ところが現代産業社会では、世の中の究極の価値基準が人間にとっての有用性となり、自然の諸物は独立した尊厳を奪われて単なる手段になりさがりました。人間個体の幸福追求が最も重要な権利とされ、いまそれが欲望実現に向かって暴発しているのです。

個々人が、社会全体または生物界からきり離されて自由を享受している状況です。

しかしこの有様は、根本的に自然なあり方ではないようなのです。

「ひとは一切の生きもののうちに自己を見、また自己のうちに一切の生きものをみる」というのが宗教古来の教えでした。いまそのことについては、現代生命科学は根拠があることを見出しつつあるようです。人間は本来、「万物に連なっておりそのお陰で存在している」という意識を根底にもっているのではないかということです。

この底なる意識が表層の欲望に抑えられてまともに作動していないと考えられるのです。

とすれば、その根底の意識が覚醒され助長されれば正しい道を歩めるということになりましょう。しかし現代は、いかに正しく生きるかが教えられることは殆どなく、いかに利得するかを煽り立てる情報のみが氾濫しています。歴史的にも異様な時代です。政治をはじめあらゆる領域で汚名をものともしない私物化が始まっています。私たちは、国全体の精神構造が危険水域にあるなかで、それぞれの持ち場で公共の福祉増進のためにたたかっていかねばなりません。

当センターは、設立以来20年間、ひとえに公共の福祉確立を求めて活動して参りました。今後とも志を同じくする皆様方と一緒にあきらめることなく努めて行きたいと願っております。